

1-2-12a国家

ここでは、「国家」についてお話しします。

まず、「国家」の本質としての暴力性について考えます。

「国家」は一部の大学でしか出題されないテーマですが、出されるときは真正面から論じられます。

かなり踏み込んだ話をしていますので、覚悟してください。

説明を少しでも簡単にするために、日本国籍をもっていることを前提にしています。

①暴力装置としての国家

i) 暴力装置

国家とは暴力装置である——というのと、国民の人権を無視する独裁国家を思い浮かべるかもしれませんが、そうではありません。

国家は、一定の地域を支配する政治権力です。

そこに住む人たちは、国家の意思に従うように強制されます。

たとえば、買い物をするとき、消費税を払います。

払いたくない、といって、君たちは拒否できますか。

できませんよね。

払わないと、ものを売ってくれません。

日本に暮らす人たちは、みんな、この消費税から逃れることはできないのです。

こうした社会制度は、国家が「一つの国」として成り立つために必要です。

が、そこで暮らす人たちみんなをむりやり従わせ、「一つの国」として一元化しようとする以上、その実態は暴力でしかありません。

国家には、暴力性が本質的に内在しているのです。

ii) 憲法

そう考えると、民主主義を標榜する国家は、根本的に矛盾を抱えていることになります。

民主主義は、多様な意見が存在することを前提とします。

多数決で物事を決めるのは、唯一の正しい意見などというものが存在しないからです。

大勢が賛成しているから、「とりあえず」その意見でいこう、というのが民主主義です。

ところが、その「とりあえず」が国家の意思として国家全体に強制されます。

民主主義国家は、民主主義として多様であることを求めながら、国家として一元的であることを求めるわけです。

国家として一つにまとめようとして、意見の多様さが失われてしまえば、民主主義としては死ぬ。

「憲法」は、この矛盾に対する予防装置だといえます。

日本国憲法は、前半で基本的人権を規定し、後半でそれを保障するための制度を規定しています。

憲法は、人権を制限しているのではなく、むしろ、国家という暴力装置から人権を守っているのです。

そうすることで、民主主義の根幹である意見の多様性を担保しようとしています。

私たちが自分の意見をもつことを抑圧されたり、意見の表明を邪魔されたりしたとき、憲法こそが国家と戦う武器になります。

いくつかの地域や国では、今でも、政府に反対する人たちが逮捕されています。

国家の暴力性の悪しき例といえるでしょう。

インターネットでは、不快なものまで含めて、さまざまな意見が飛び交っています。

それを安易に取り締まれないのはなぜか。

そうしたさまざまな意見が表明されていることこそが民主主義を成り立たせる前提だからです。

iii) 戦争

国家自体が暴力性を孕んでいる以上、国家同士が衝突して、戦争に至る可能性は常にあります。

経済的な側面から考えると、、、

近代には、経済的な単位である国家が富を求めて戦争を繰り返しました。

20世紀になると、世界が大きく二つに分かれて、二度の世界大戦と冷戦を経験します。

世界全体が豊かになるにつれて、経済単位が国家では収まらなくなり、それにしがたって、戦争の規模が大きくなりました。

ところが、**グローバリゼーション**が進む現代においては、逆に、その内部で具体的な戦争が起こりにくくなっています。

グローバリゼーションとは、世界全体が経済的に一体化していくことです。

生産も消費も、世界中の国々が互いによりかかりあいながら成り立っています。

だから、他国への攻撃が自国を経済的に痛めつけることになります。

東日本大震災の際も、日本の工場が止まることで、世界中の生産が停滞しました。

サプライチェーンという名の鎖で、世界中の工場がつながっているからです。

もちろん、だからといって、戦争の脅威がなくなったわけではありません。

経済的な損得だけで国家間の関係が語れるはずもありません。

それに、グローバリゼーションから外れた地域では、内戦や国家間の紛争がまだまだ続いています。

が、グローバリゼーションが戦争の可能性を引き下げたことはたしかでしょう。

「戦争は政治の一手段である」といわれます。

が、それが有効な手段でなくなりつつあるのが現代だといえます。